二〇一三年一一月一九日（参加者一二名）

小春日を窓に小犬の美容院　菜々
夜叉のごと風にうち伏す枯尾花　〃
冬たんぽぽ人麻呂歌碑の辺に黄なり　〃
ハングライダー峰より放ち山眠る　〃
枯葎歌碑は読み人知らずかな　〃
にぎやかに声とぶ保育園小春　はく子
錦木の極みと見たるもみぢかな　〃
枯尾花伏して小径を通せんぼ　〃
散もみぢ綾なす万葉歌碑の径　〃
真青なる空にもみづる大欅　〃
古井戸のほとりは殊に石蕗明かり　わかば
陣二つ争ひもなく鴨の池　〃
走り根も隠るるほどや落葉嵩　〃
オルガンの響く聖堂寒からず　ぽんこ
浅瀬なる石の間に間に鴨あそぶ　〃
一陣の風に駈け出す落葉かな　〃
暖房の床屋の椅子にまどろみぬ　宏虎
老かこつ吾を一喝冬の雷　〃
業平の歌碑おほひたる散紅葉　こすもす
短日や携帯電話電池切れ　〃
ローカル線子等の絵吊るし冬ぬくし　小袖
切り株に仲よく隣る冬帽子　〃
参道はさながら紅葉浄土かな　よう子
裸木に一葉の残る虚空かな　〃
柿一つ残し大空暮れなんと　有香
枯蓮相討つごとく寄りかかり　よし子
あぢさゐの枯るるといへど色仄と　満天
植物園疎なる梢に冬日燦　〃
散紅葉万葉歌碑に堆く　〃

定例句会みのる選

二〇一三年一一月一九日（参加者一二名）